
人間のクズ

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間のクズ

【NNコード】

N0832X

【作者名】

まなか

【あらすじ】

この町ではバカが多い。僕はそう、冷静に判断を下している。
毎晩毎晩同級生とはいえないくらい幼く、バカな連中等がつるんで暴走族とやらで走り回っている。そのたびに警察に通報しているが全く効果はない。そういうところだけ賢いのだろうか。

そんなことはいい。僕がここに記しておきたいのはこの間その人間のクズ。本当、国民から外してほしい。あんなやつらに平等権だの、人権だのあったこっちゃない。らがやつていたことだ。僕がすることは本当に小さいことなのかもしれない。アクセス数が一

柄のブログに書いたところで何も変わりはしないかも知れない。だけど、これを読んだ人が少しでも何か考えてくればいいと思う。

片山のブログより転載。

一話 始まりの、夜。

この町ではバカが多い。僕はそう、冷静に判断を下している。毎晩毎晩同級生とはいえないくらい幼く、バカな連中等がつるんで暴走族とやらで走り回っている。そのたびに警察に通報しているが全く効果はない。そういうところだけ賢いのだろうか。

そんなことはいい。僕がここに記しておきたいのはこの間その人間のクズ。本当、國民から外してほしい。あんなやつらに平等権だの、人権だのあつたこっちゃない。らがやつていたことだ。僕がすることは本当に小さいことなのかもしれない。アクセス数が一桁のブログに書いたところで何も変わりはしないかもしれない。だけど、これを読んだ人が少しでも何か考えてくれればいいと思つ。

僕はクラッカーだ。

年齢は15歳。数学と情報処理に優れているが、どこかいつも周りと違うと言われてしまう。まあ、周りがクズばかりだとそうなるか。

「……またやつてるよ。 あ、そろそろハードディスクがいつぱいになるな」

苦手な理科の勉強をしながら机についている6台ものモニターで奴らの行動を監視している。この町のたまり場に監視カメラをこつそり設置しては犯罪を摘発するのが僕の趣味となっていた。警察に証拠を提出すると怪しげな表情で疑つてくるが、まだなにも言われていない。

「なに……やつてるんだ……？」

映し出された映像の一つに見覚えのある顔があった。

急いでペンを放り出し、キーボードにコマンドを打ち込む。そし

て拡大表示をした。

「な、なぎさ！」

僕は息することを忘れ、心臓を動かすことも忘れた。両手がかたかたとふるえる。自然と涙があふれ出てくる。

モニターに映し出された彼女は周りからクズ共に何か暴力をされていた。

「……嘘」

僕は我に返り、さらにコマンドを打ち込む。場所を確定。ここからすぐだ。僕は非常用のものを持ち、すぐに家を出た。机の上には万が一に備えてメモを残しておいた。

一話 クズ共を、通報せよ。（前書き）

この物語はフイクショノです。

一話 クズ共を、通報せよ。

僕はそつと陰から様子を見る。

「やめて！ お願ひ！ お願ひします！ 何でもしますからあああああああああ！」

耳を塞ぎたくなるようななぎさの悲鳴が聞こえてくる。なぎさは僕がずっと好きなクラスメイトだ。僕は落ち着いてケータイで警察に連絡を入れる。

「はい、警察署です」

「もし、も、もしもし……」

「はい」

「い、いま、ここで暴力を受けている人がいるんですが。男の人たちじゅう……なな名ほどで」

「わかりました。場所はどこですか？」

「はい、えーと……」

そのとき、電話を当てていた左側からすごい衝撃とともに僕は横に吹っ飛んだ。携帯は木つ端微塵となり、飛んでいく。 やばい。

「ようようよう！ かーたーやーまーくーん！ こんな時間に君みたいな優等生がなーにやつてんすかあ？ あ、もしかして俺らの団に入れてほしいとかあ？」

彼らは日本語をうまくしゃべれないらしい。一回病院行つてこい。

僕がいいところを教えてあげる。

「なぎさをはなせ」

「ああん？」

金髪に髪を染めた彼はほかの仲間等に合図をして僕の周りを取り囲んだ。

「か、片山君！ 逃げて！」

なき女の悲鳴が聞こえる。逃げれるもんなら逃げてるや。

「どうこうことだよー。むりあー? ケーサツに電話してたんだろ
お?」

「はは、あははははー!」

「何がおかしいんだつ!」

ツツ! 僕は顔を蹴られた。だがしかし、僕はマジ体質な為に効果がないというか逆に興奮してしまって困る。

遠くで警察のサイレンが鳴る。やっぱり最初から田舎をつけていたのだろう。

「やべー

誰かが叫ぶ。

その一瞬の隙をついて僕はリュックサックから筒型のものを取り出した。

「死ねええええええええええ!」

ダダダダダダダダ という音とともに銃口から釘が飛び出す。もちろん、脅しだ。自作の銃はどこへ飛んでいくかわからないために見当違いな場所をわざと撃つ。

「おい! やめろおー! この女がどうなつてもいいのかよおー! ?」

「つ

僕は息をのんだ。警察のサイレンは遠くへ行つてしまつてこる。

まづい。

「さあーて、おい、おめー、片山を拘束しろ あん? 繩でもなんでもいい

ボスらしき金髪クズは部下らしき銅髪（本当に銅色なのだ。茶髪でもない）クズらに指示をだし、僕に近寄つてくる。
「くつ……」

一触即発の空氣。僕はそつと引き金を引く。が、

「……はつはつはー! 残念だつたな、タマギレだつてよおー! ギヤハハハハ!」

金髪クズが笑うと銅髪クズも笑う。ひどく滑稽に見える。もう僕

は為すすべはない。

僕は奴らに縛られた。そして田の前に止まざるがいる。

「やめろ……やめてくれ……なきただけは……」

「バカやつれ、お前殺してもつまんねえからよ、おお、いこい、

い、いこい殺してやるんだおおー！」

薬物にでも手を出しているのかうれつがまわらない金髪クズ。

だけど僕はなきもの」とことで頭がこいつぱいだった。彼女だけは

助けたい。

いこいは医師は全くない。

「手始めによおー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832x/>

人間のクズ

2011年9月27日07時09分発行